

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部看護学科
名 前 黒田 由香理
作成日 2024年6月25日

1. 教育の責任

現在までに本学で担当した1)科目、2)チューター活動、3)委員会活動の3つに大別し以下に記載する。

1)科目

新カリキュラム ナーシングスキル学Ⅰ(1年・必修)、ナーシングスキル学Ⅱ(2年・必修)、ナーシングプロセス(2年・必修)、ヘルスアセスメント学Ⅰ(1年・必修)、看護基礎ゼミ(1年・必修)、看護基盤実習Ⅰ(1年・必修)、看護基盤実習Ⅱ(2年・必修)。

旧カリキュラム 生活行動の援助技術(1年・必修)、ヘルスアセスメント(1年・必修)、基礎看護学実習Ⅰ(1年・必修)、診療に伴う援助技術(2年・必修)、基礎看護学実習Ⅱ(2年・必修)、統合実習(4年・必修)、看護研究(4年・必修)、チーム医療論(4年・必修)。上記科目において、講義や演習・実習指導を実施した。責務としては、円滑な授業運営に向けて、準備・打ち合わせ・片付けを行った。

2)チューター活動

これまで1年次生から4年次生を担当した。今年度は、2年次生を担当している。主に1年次生には、大学で学ぶことの意義を伝え、4年次生には国家試験対策と就職支援を行った。

3)委員会活動

実習委員会に属し臨地実習ガイドライン・看護技術経験録の見直しや発注、教員の実習用携帯電話の管理・請求を行った。臨地実習ガイドラインは、学生と受け入れ施設とによって、実習がイメージしやすく、実習中の学生の安全を確保できるよう努めている。

2. 私の理念・目的

1) 私の教育理念

私は、将来学生が患者・家族から「あなたが担当看護師で良かった」と思われる看護師になってもらいたいと考えている。それには、患者・家族からの信頼を得ることが不可欠であり、単に知識・技術を身に付けただけでは、得られないであろう。専門職である看護師には、知識・技術・人間性がどれも欠けることなく求められと考える。そして、学生は知識・技術を人に与えてもらわないと学べないではなく、好奇心をもち自ら調べ学び続けられる人になって欲しいと考えている。また、学生には人間性について、常に人に関心を持ち、個別性のあるよりよい看護を目指して省察する力と自己研鑽できる人になって欲しいと考えている。

次に多種多様な職業がある中で、看護を志し入学した学生に対し、私は看護教員として、学生に看護の楽しさや素晴らしさ、可能性を伝えることを大切にしている。また、看護の未来を担う、沢山の可能性を秘めた学生の成長を信じ、本人も気づいていな強みを発見し、学生と共有して課題と共に伸ばしていくことを心掛けている。また、学生の育った時代や取り巻く環境を捉え、目の前の学生から見える視界で物事

を考えるように努めている。

最後に、将来学生が本学で学んでよかったと思える魅力ある大学作りを目指している。

2) 理念をもつに至った背景

教育とは、どのような人を育てようとするのかの目標なしに存在しないと考える。加えて、看護教員は、看護を志す学生に看護の楽しさと可能性を伝えることが使命であると考え。看護の実践者である教員が、学生に、自分の言葉で看護の楽しさや素晴らしさ、可能性を語ることで、学生が看護について考える一助につながると捉えているからである。

また、学生は、可能性の塊と捉えている。私は、臨床経験が長いがその間多くの新人看護師が、立派に達人看護師へと成長していく過程を見てきた。これ以上に、自身の体験から大学教育における学生の成長は、顕著であると実感している。1年次生は、「看護とは？」まさに看護の第一歩から学ぶ。2・3年次に看護の専門性を学び、4年次の統合実習の際には、学生の成長に驚かされる。私は、学生が大学4年間で大きく飛躍することを目のあたりにしたからこそ、学生の成長を信じている。学生に限らず人には、1人ひとり強みがある。本人も気づいていない強みを一つでも多く発見することは、学生にとって自信と自己理解につながり、将来人の生命を預かる専門職としての責務を自ら学んでいくための要となると考えているからである。

また、日々学生から見える視界を考えるように努めている。それは、学生を取り巻く環境を把握していなければ、適切な教育にならないためである。日々変化が著しい社会において、学生を取り巻く環境も大きく変化している。既存の方法でなく、対象学生に合わせた関わりがよりよい教育につながると考えるからである。

3. 教育の方法・戦略

教育方法で大切にしていることは、知識・技術を教えるだけでなく、学び方を教えることである。看護は、実践の科学と言われるが、その時、その場で臨機応変に目の前の対象者のニーズをつかみ個別性のあるよりよい関わりを模索する。そのためには、自ら考える力が不可欠である。学修は、学生自らが事柄について、「なぜそうであるのか？」という疑問を持ち、自分で探求する力が基盤となる。そのために、授業方略として、授業導入時の内発的動機付けを実施している。学生にとって想像しやすい身近な話題から入り、「面白そう。学んでみたい」と思うことから始まり、結果学生が「面白いから学んでいる」を目指している。

授業目標・方法・評価は、ブルームのタクソミーを用いて目標を明確にして、具体的に効果的な教育を目指している。加えて私は、授業・演習における教員のねがい大切にしている。授業・演習後に学生にどうなってもらいたいのかを軸に授業を構成している。教

育において、ねがいは要であると考えているからである。

教育方法・方略の中で、大切にしていることは、授業準備である。あらゆる状況を想定し、綿密に準備を行う。授業・演習において事前準備は、重要で全体の8割を占め、残り2割は授業・演習時の学生の反応を踏まえ臨機応変に実施することという認識でいる。このため、授業案作成、配布資料作成、演習物品の選定・セッティング、教員配置、教員間の連携は丁寧に行っている。授業・演習では、集団を対象に教育を行うことが多いが、教育は学生一人ひとりの状態を見て、個に応じた支援が重要である。そのためには、学生の反応や声を常時確認して授業評価を行っている。

授業内容は、将来学生が活躍するであろう10年後、20年後の未来を想像して教育に反映することを心がけているが、急速に変化する未来を想像することは難しく課題である。

4. 学習成果

自己の教育活動の評価・成果は、リアクションペーパー、提出された課題内容、小テストの正答率、授業中の反応で確認している。以前、1年次の後期授業科目《生活行動の援助》で手浴・足浴について、私の臨床経験を用いて授業を行った。その授業における私のねがいは、使用のお湯の温度や安楽な体位といった技術の基本的知識はもとより、患者にとっての個々の清潔の意義を考えられる人になって欲しいことであった。授業後のリアクションペーパーには、数名の学生が「手浴の時間は、事例の患者にとって、清潔にすることで得られる身体的・精神的意義だけではなく社会的意義もあることを学んだ」と記載していたことから、私のねがいが通じていたのだと感じることができた。教員としては、自己の教育成果を確認できた内容であった。

5. 改善のための努力

改善が必要な事項は、講義における、学生の学修の主体性が得られにくいことである。現在、私の担当する講義は、学生にとって知識・技術を与えられたままに詰め込む形態になっていると感じている。改善方法としては、学生が講義内容に好奇心を持てるよう導入時の仕掛けを行うことである。学生にとって「面白そう」と思えるような仕掛けが必要である。具体的には、学生が日々の生活の中で体験しているまたはできそうな内容を提示し、調べてくることから始めることである。

6. 今後の目標

短期目標:

24年度末までに、個別指導の充実を行う。具体的には、個別指導が必要と判断した際、学生のニーズと個別性を踏まえ教育的支援を行う。評価は、学生の行動変容の有無と学生自身が自己の成長を自覚しているか否かで行う。

長期目標:

25 年度末までに、学生の内発的動機に基づいた主体的な学修方法を実施する。具体的には、私が担当する講義・演習において、学生が「面白そう。学んでみよう」と思える内容を実施する。評価は、授業中の学生の反応、意見やリアクションペーパーで行う。